情報化社会 ―技術革新がもたらす社会生活の変化―

おやさと研究所准教授
森　洋明　*Yomei Mori*

はじめに

「知恵の仕込み」を親神から授かった人間は、それを活かして社会を築きあげてきた。これまでに狩猟採集社会から農耕社会、工業社会へと発展させて、そして今日、コンピュータやインターネットの登場により、社会のさまざまな面で劇的な変化が起こり、本講のタイトルである「情報化社会」を迎えるに至った。それはまた、人類が経験した「農業革命」「産業革命」に次ぐ、３つ目の「IT 革命」とも呼ばれている。ここでは、この情報化社会がもたらした社会変化を概観した上で、伝道に関わる点について考察してみたい。

情報化社会による社会変化

90 年代からのインターネットや携帯電話の普及は、情報化社会到来の原動力となったが、同時に私たちの日常生活にさまざまな変化をもたらした。情報の発信や収集といったコミュニケーションの利便性が高まった一方で、個人情報の保護やサイバー攻撃、ネット上のいじめやネット依存など、危険性も指摘されている。誰もが情報の発信者となれるインターネットの空間においては、世界中から種々雑多な情報が溢れ、その真偽に関する問題も指摘されている。一つの「つぶやき」が大きな社会問題に発展したり、若者を過激な思想・主義に走らせたりすることもある。また、インターネットの普及は人間関係のあり方にも大きな変化をもたらせた。SNS（ソーシャルネットワークサービス）は遠隔地とのコミュニケーションを飛躍的に容易にさせ、そこにはもはや国境の壁もないに等しい。さらに、これまでの地縁や血縁といった「選べない」人間関係から、「選べる」人間関係へと変わってきた。ただその裏で、インターネットにつながらない人たち、あるいは「選ばれない」人たちは、ますます孤立していく危険性もはらんでいる。

情報化社会では、社会のさまざまな面が「断片化」しているとも指摘されている。例えば、膨大な情報から取捨選択、比較・検討されるなかで、それぞれ個々人に応じた最適なものを選べることが可能な社会では、その結果として、同じ空間（国や地域、文化圏、世代など）にいる人たちであっても、情報や価値観が共有されないこともあり得る。物理的空間が優先されるなかで結ばれていた人間関係よりも、インターネット上における人間関係がより優先されるのである。そして、そのことによって、現実の物理的空間のなかに、さまざまな情報ネットワークの「孔」が作り出され、社会が「多孔化」していると言われている。このような社会では、複数のつながりが物理的空間を超越して存在するのである。

宗教に対する影響

そうした社会では、宗教も「情報化」されていく。インターネットにはさまざまな宗教的な言説が溢れ、その情報が「消費」されていく。情報の真偽性の問題は、宗教と宗教でないものの境界線にも当てはまり、そのボーダーラインはますます曖昧になっていく。このようななか伝統宗教という枠組みが希薄になり、そこに他宗教の教義や宗教ではない要素などが取り入れられることによって、本来の教えが多様化してくことになる。宗教的情報が個々人に応じて取捨選択される今日の社会において、宗教が「個人化」されていくのである。それは特定の宗教的共同体には属さない状態で「聖」なるものと追求することでもある。こうして宗教教団による集団的統合力が衰退すると指摘されている。

その反面、物理的空間を越えてつながるインターネット社会では、国を越えての共同体意識が生まれこともある。たとえばキリスト教文化圏のヨーロッパに点在するイスラム系移民たちは、SNS などインターネット上のつながりによって、空間を越えた宗教的共同体意識を感じるようになってきている。既成の枠を越えた新たな「集団化」の可能性も指摘されており、IS などの過激組織はその好例とも言えるだろう。

情報化社会における伝道のあり方

こうした人の「知恵」でもたらされた情報化社会の流れは不可逆的であり、それを否定することはできない。見方を変えるならば、その「知恵」も親神の「仕込み」の結果に他ならないのである。したがって、その時代の変化を読み解き、利便性や危険性を踏まえた上で、それにどのように対応していくのかという姿勢が問われてくるのではないだろうか。

宗教のボーダーレス化は、一つの宗教枠における「信者」と「未信者」の境界を不確実なものにすることでもある。しかしそのこと自体は、「里の仙人」と表された教祖の信仰生活のあり方とそもそも相反するものではないと考えられる。この道の教えは、信仰実践と日常生活を「分ける」ものでは決してない。日常のなかに信仰を実践していく生き方が奨励されている。このことはまた、「このよふを初た神の事ならば　せかい一れつみなわがこなり」（四号 62）と教えられるように、信仰する者と信仰しない者を「分ける」ような神でないということとも呼応する。あるいは、「何の社、何の仏にても、その名を唱え、後にて天理王命と唱え。」（『稿本天理教教祖伝逸話篇』170「天が台」）の話からも分かるように、分け隔て無い人類の「元の親」としての壮大な世界観とも連動するのではないだろうか。

また、多孔化する社会においては、限界集落など距離的に離れた人とのつながりを、新たなコミュニケーション回線によって構築することも可能である。例えばそれが日本から遠く離れたアフリカであっても、回線さえつながっていれば、そこの社会にそれまで存在しなかった「最後の教え」という新たな情報ネットワークの「孔」をもたらすことも可能なのである。

おわりに

情報発信という点からすれば、誰もがこの教えの発信者になれる。確かに、どこで、誰が、どのようにつながるかは不透明であり危険性もあるかもしれない。しかし、この教えが世界中でまだまだ知られていない現実を考えるならば、物理的空間を越えて情報発信ができる今日の社会は、布教伝道にとって好機であるとも言えるだろう。インターネットでは「バーチャル参拝」を掲載している寺や神社もある。その是非はともかく、いかにより多くの人たちにこの教えを発信するのか、情報化社会における伝道の新たな取り組みが必要とされている。そして何よりも、私たちの日常の生活のあり方自体が、周囲の人たちにとって「陽気ぐらし」という「情報」の発信となるように努めることが求められている。